

遊んでしゃべって多

ナルク函館はまなす 19日「いぐべ



ボランティア団体「ナルク函館はまなす」は19日午後1〜4時、誰でも立ち寄ることができると多世代型交流サロン「みんなのたまり場 いぐべ」を、市内千代台町12の同団体事務所で開く。35回目

を迎え、同団体は、地域の子どもたちと保護者の来場を呼び掛けている。はまなすは全国組織のNPO法人「ニッポン・アクティブライフ・クラブ」の支部組織で、会員制

び体験を通じて、訪れる子どもたちと会員、保護者、運営を手伝う大学生らが楽しく交流しているという。中村代表は「お茶を飲んでおしゃべりしたり、ゆっくりゆっくりだけでも良い。楽しい地域交流の場、安心してくつろげる居場所」と話す。

19日は、半紙と水彩絵の具を使ってうちわつくりを行い、かき氷を味わう。競技用の輪投げや、日本地図のパスルなど「体を動かしたり、工夫しながら遊ぶ道具も用意している」という。参加無料。サロンには、はまなすの会員平均10人がおり、中村代表は「会員は、子どもたちと接することで、新たな気づきも出てくる。お互いに刺激をもらえ」と話している。お問い合わせは同団体、電話013・8・31・2048へ。

(押野友美)



「形にとらわれない作品見せ」と語る海花保和さん

タハコダテ3階(本町24)で開かれている。タイトルは、探検隊を意味する「Expedition」。ジャンルに足を踏み入れるように

が中心。具象の中にも、ぼかした色の付け方など抽象的な表現を取り入れ、「自分でも思っていないものが生まれる」とワクワクする」と滝花さん。

「フードバンクに」 信金と生保10万円

道南うみ街信金とフコクしんらい生命保険(東京)は、共同でフードバンク道南協議会に10万円を寄付した「写真」。

持続可能な開発目標(SDGs)の達成に向けた取り組みの一環で、2021年からフコクしんらい生命保険が全国の信金と実施。同社主力商品「ハローキティの定期保険」の24年度、同信金販売件数に応じて両者が1万6千円ずつ



SDGsに係る共

つ、さらに「地域社会の発展に貢献する」という理念に基づき同信金が6万8千円を拠出し、計10万円を贈った。

10日の贈呈式で道南うみ街信金の後藤忠広常勤理事は「市内16の子ども食堂支援のため活用してほしい」とあいさつ。18年から処分せざるを得ない食料を必要とする人へと届ける活動を行っているフードバンク道南協議会の中森司事務局長は「前日に倉庫の米がゼロになつてしまった。さっそく寄付金で米を購入し、子ども食堂に配りたい」と深謝した。(野長瀬郁美)

函館・弁天台場かいわい

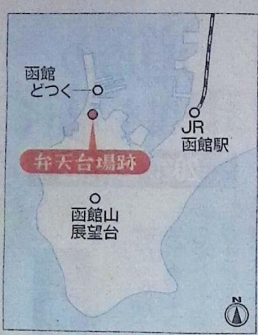
瀧沢鈴 昭和百年 番外編



はじめに

町には町の色、匂いがあります。特にな活気、そして歴史があるものです。90年前、函館の西部地区、弁天台場に住んでいた私は、あのころの弁天台の町々、そして台場を忘れることができません。

この文を読んだ10、20、30代の人たちは「函館にも、こんな所に、こんなことが、こんな話があったんだ」、40、50代は「へえ、あの町、この通りがねえ、変



わったものだ、当時を見たかったな」、60、70代は「そうそう、こんな話、じつとちゃんやばちゃんに聞いたことがあるなあ」と思い、80代、90代は「そうさうだ、そうなんだよ。懐かしい話だねえ。若いころを思い出すと」と言っている。令和の現在と比べ、思い出し、笑いながら見るのも面白いものです。

初めて「台場」を知った人たちのために、台場の様子を少し書いてみたいでしょう。

昭和の初期

私は函館市弁天台八十八番地、弁天台場という所に住んでいました。今の函館とつづく裏です。弁天台場は通称「弁天台」といわれ、1886年(安政3年)から約8年の歳月をかけ、外海に沿って海面を埋め立て、石垣を築いて作られたもので、海から陸地の様子は全く見えませんでした。

初めは外国船の襲来を防ぐため、江戸末期に武田斐三郎が設計。松川弁之助と石土の三郎が工事を担当し、岬の手前

たきわす。1926年(大正15年)函館生まれ。3歳から小学6年までを弁天台跡(弁天台)近くで暮らす。41年(昭和16年)に教職に就き、相模原市立小(八雲町)に赴任。八幡小(函館)、高砂小(同)を経て7年に退職。80代から執筆活動を始め、北海道新聞生活欄「いずみ」のほか、文芸誌にもエッセイを発表。一浪館長(角田)に響く声、函館弁天台に暮らした人々(2014年)、「はなはあさの思い出雑誌」(20年)を自費出版。読みの会「花音のメンバー」の茶の時間を大切にしており、好物は「ハミ味のアイスクリーム」。

に舞台を作った大小の門もの大砲を置いていたという話ですが、その用は全くなされず、96年(明治29年)に解体された。しかしこの台場は69年(明治2年)の箱館戦争の時、官軍の奇襲に負けた市中警備の兵隊が入り込んで反撃しましたが、給水、食糧に窮して降伏した時に使われただけだったそうです。

昭和に入ってから建てられた私の家の場所は、台場解体跡に残った一部なのだそうです。だから、海の上に建てられたといふことになります。

当時、舞台には大砲を置いたと思われる丸くて大きく切り込んだ場所が2カ所ありました。舞台は太く大きな棧が何本も組み込まれ、京都の清水寺を思わせるものでした。

満ち潮の時、舞台の下は海となり、小魚が泳ぎ、昆布がゆらめきます。引き潮になると海底が現れ、小さな砂場となつて虫や小さなカニが走り、格好の遊び場でした。台場から隣の仲町や函館市内のどこへ行くにも、先人の作った長い一本道を通

らなければなりません。石垣とつづく工場に挟まれているこの一本道は、仲町に行くのに、子どもの足では20分以上かかりました。天気が悪く海が大荒れに荒れた日は、波は牙をむきながら石垣を登り、空へ舞い上がって豪雨となり、一本道にたたきつけます。側溝のないこの道は川となつて、とつとつと岬へ流れます。

当時の台場には私の家1軒だけで、あとはつづく工場ばかりでした。電気は通っていましたが、水道がなく、生活に使う水は仲町までくみに行きました。それから1年ほどたつて、すそ野には北海道水産試験場函館支場が建てられ、水はそこからくめるようになったので、一番喜んだのは母でした。

つづく会社と石垣の間に作られた一本道には、街灯は、基もなく、夜道の往来には懐中電灯を持ち歩きました。港内外の波状調査をする父の仕事上のこととはいえ、家族6人がここの10年も暮らしていたのです。

台場には数多くの逸話がありました(です)

そのたび私たちは喜び、怒り、悲しみ、楽しみながら過ごしてきました。大自然の中の間場は、私たちにすばらしい四季をたつた味わせたくれたのです。輝く星を、希望を運んでくれる流星。四季折々、水面に遊ぶ水鳥の群れ。そして台場に楽しみを求めてくる人たちの人情。それらとの触れ合いは、お金では求めることのできない貴重なものでした。

「函館市弁天台八十八番地」私はこの弁天台で育ちました。ちよつぱりの好奇心も、ちよつぱりの努力、頑張りも、台場からもらいました。だから今、自分の年齢を忘れることがあつても、台場を忘れることはありません。そして、弁天台の町々、胸の奥から離れることはないのです。

*

90年前、函館・西部地区の弁天台台場近くに暮らしていた瀧沢鈴さん。函館市田家町は、台場がいよいよの変遷を見つめ、実際にあった出来事を書き続けている。「悲しい人もつらかった人も、読んで『はなはあさ』と笑ってくれば、その悲しみは半減するかな。連載「昭和百年」番外編として、瀧沢さんが幼いころの記憶をたどり、弁天台がいよいよの思い出をつづります。

(12回連載、次回は24日に掲載する予定です)